

- 一 問一 a 明後日 b 物資 c 周囲 d 貸〔す〕 e 過程
 問二 A 喜 B 楽
 問三 人間の生活は、隣人との社会的な関係の中で営まれている。ともに生きている仲間の時間の使い方と自分の時間の使い方とを調整し、調和させながら生活しなければならないのだ。
 問四 自分だけの時間に自分の欲求を最大限満たすために効率的な過ごし方を考えることは、時間はコストであり金に換算できるとする「経済的な時間」を生み出す効率化の考え方と同じである。
 問五 元来、人間は進化の過程で高い共感力を身につけ、他者との関係の中で自分の生き方を決め、ともに生きた時間によって信頼を培い、幸福を感じる存在だ。高度経済成長期を経て、自分だけの時間を追い求め、その時間をも効率化の考え方の対象とした結果、生活時間のすべてが「経済的な時間」となってしまった。これは時間に関する人間の本質に反している。
- 二 問一 a イ b エ c ア
 問二 特攻で死んだ孫は、自分の意思によって特攻による死を選んだのではなく、意思に反した理不尽な命令によって死んだのかもしれない。その無念を思って、怒りと悲しみでいっぱいになっている。
 問三 特攻という異常な攻撃方法をとらなければならないほど圧倒的な劣勢となり、武器を製造するための原料も生産力もぎりぎり追いつめられた状況になっている。
 問四 一緒に出撃した仲間は特攻を果たして死んでいったのに、エンジンの故障とはいえ、自分だけ生き残ってしまったことに罪悪感を覚え、強く苦しんでいた。しかし、本土にはもどらず、戦争が終わるまでこの島に隠れていればいい、というカミの言葉にふれて、生きることを肯定する当たり前のことに心打たれ、苦しんでいた心が和らいだ。
 問五 神さま
 問六 特攻に成功することは、死を意味する。人形には「死んで神になるように」という呪いがこめられているとあっていい。人形の意味を理解したカミは、「死」にふれたかのようにとまどいを覚えた。そして、父や兄が出征する時、「お国のためにがんばってきてね」と手を振って送り出したことは「死んで神になるように」という人形の呪いと同じであることに気づいた。死ぬことを肯定するようなことはもうしたくないという思いをいだくにいった。

解 説

一 出典は、山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』〈毎日新聞出版〉。

問三 ——線部直前に「つきつめて考えれば、人間の使う時間が必ず他者とつながっているからである」とあります。また、直後で「ともに生きている仲間の時間と速度を合わせ、どこかで重ね合わせなければならない」と言い換えています。人間やゴリラにとっての時間の基本的な特徴が簡潔に述べられています。解答条件に「わかりやすく」とあります。「わかりにくい」表現や内容があったら「わかりやすく」言い換えることを求めています。「～時間が必ず他者とつながっている」「仲間の時間と速度を合わせ、どこかで重ね合わせ～」とは「わかりやすく説明」すると、どういうことか——易しそうで難しい問題です。

問四 A「それ」＝B「自分が節約した時間と同じ考え方」という関係ですから、「それ」の内容を明らかにしたうえで、この等式の右辺の内容をわかりやすく言い換え、 $A=B$ と組み立てます。「～を考える。でもそれは～と同じ考え方」という文脈を確認。直前の「映画を見て、～可能かを考える」は、さらにひとつ前の「自分の欲求を最大限満たすために、（せっかく得た自分だけの時間の）効率的な過ごし方を考える」の具体的な言い換えです。それの内容としては抽象度の高い方を採用します。次に「自分が節約した時間」は、どのような考え方から生まれたのかを読み取ります。直前の段落末尾「効率化や経済化の観点から時間を定義～つまり、時間はコストであり、金に換算できるという考え方」に着目できたか。

問五 ——線部を含む一文を読み返す——「それは自分が節約した時間と同じ考え方なので」と理由説明の表現が——線部の直前に先行しています。問四と多少重複しますが、「自分だけの時間」をも経済活動同様、「効率化の対象にしてしまった」点が指摘されています。また、——線部直後に「それ（——線部の内容）はそもそも人間がひとりで時間を使うようにできていないからである」という理由説明文があります。「そもそも」と“本質論”が展開されます。この後に続く、人間にとっての時間の“本質論”の要点をまとめます。さらに最後の段落中の「～孤独な人間が増えている。それは経済的な時間概念によってつくられたものだ」という表現も参考にして、効率一辺倒の時間の使い方が人間にとっての時間の“本質”と相容れないものなのだとまとめます。

二 出典は、中脇初枝「神に守られた島」〈講談社〉。

問一 a 直前の伍長の言葉が「読点（、）」によって不自然に分断されている点と直後の「ぼそぼそと言う」という表現から推理します。 b 直前の「かえって」に注目します。会話の内容は「特攻」の“美談”の背後に隠された理不尽な現実です。感情的にも心理的にも大きく動くような内容であるにもかかわらず、どんな語り口だったのか。 c 伍長との別れに際し、伍長が手を振ってくれたのに、なぜか、カミが手を振らなかったことを「ぼく」は責めています。

問二 特攻を志願することをめぐるじゃーじゃと伍長との会話の内容をたどり、——線部のように表現されたじゃーじゃの気持ちを推理・想像します。意思の確認といいながら、白紙（志願しない）で提出することは難しい“空気”があり、また、それぞれの事情による様々な意思表示があったにもかかわらず、全員が「熱望する」と書いてあったと報告されたと伍長は語ります。自分の孫も、自分の意思ではなく、理不尽な命令によって特攻として死地に赴いたのであろうことを思い、改めてわが孫の死を悼み、特攻死をたたえる現実の背後にある理不尽さに憤っていたのです。

問三 ——線部中の「あんな練習機」「特攻」二つの言葉から考えます。この作品の大きな構成要素である「特攻」——太平洋戦争末期の日本軍が採用した異常とも言える攻撃方法で、戦闘機のまま敵の戦艦や軍事施設に体当たりして破壊する、兵士の確実な「死」と交換に戦果をあげる——敗色が濃くなる中で考え出された「特別な攻撃」です。そのような攻撃に使われているのが「練習機」であるとは？ 正規の戦闘機がもうないということです。生産するための原料もなく、生産する工場も空襲で破壊されてしまったのであろうということが想像できます。

問四 まず——線部③の直後の4行を読み取ります。「みんなと一緒に死ぬはずだったのに。死んで神になるはずだったのに」「生き残ってしまった」——「伍長は叫ぶようにそう言うと、頭を抱えた」とあります。2頁上段後ろから15行めで「わたしは決して、命を惜しんだわけではありません。エンジンの故障だったんです」と訴えています。「生き残ってしまった」ことを恥じ、また、後ろめたく思い、苦しんでいます。そんな伍長に対して「もうヤマトウに戻らないで、ずっとここにいれば？ 戦争が終わるまで隠れていれば？」とカミは語りかけます。特攻によって死んで神になるという“呪い”をかけられていた伍長にとって生きることを促す言葉は、生きることを当然とする言葉として伍長の心に届き、“呪い”を解くことになります。生きることは当たり前で自然なことなのだという思いが、伍長の苦しみを和らげます。

問五 特攻の兵士は死んで神になり島を守ってくれている——島の人々はそのように信じていたのでしょう。特攻の飛行機について伍長と話すうちに「ぼく」は「神さまは島を守っていたわけじゃなかった」（3頁上段20行め）と気づきます。問四でたどったように——線部③から④の場面では、「死んで神になる」という“呪い”が解けていく過程が描かれています。「生きてよかった」というつぶやきは“呪い”が解けたことを告げています。

問六 2頁下段15行めから——線部で明らかにされていることは、特攻の成功を祈るということは死ぬことを祈ることに等しく、「死ねという呪い」であり“人形”はその“呪い”を象徴しているということです。そのことを理解したカミは“呪い”にふれてしまったかのようなとまどいを感じています。伍長との別れに際してカミが手を振らなかったことについては3頁下段で語られています。父や兄が出征するとき手を振って「お国のためにがんばってきてね」と見送ったことは、伍長の人形の“呪い”と同じことだと気づいたのです。父と兄を「死」に向かって送り出した、少しの疑問も抱かずに——深い後悔の念とともに同じ“罪”を二度と繰り返したくないという思いを抱くにいたったでしょう。